



2010～2011年度

中津平成週報

Rotary Club Of Nakatsu Heisei



2010～2011年度
国際ロータリー・テーマ

地域を育み、
大陸をつなぐ

国際ロータリー会長
レイ・クリンギンスミス

国際ロータリー2720地区 中津平成ロータリークラブ

会長 青木 秀 暢 幹事 土居 孝 信 会報担当 二反田新一 熊谷 直 輔 クラブ広報委員長 大和 裕 武

例会日/毎週木曜日 12:30

例会場/グランプラザ中津ホテル TEL 0979-24-7111

事務局/〒871-0055 中津市殿町1383の1 中津商工会館2F

TEL 0979-22-9716 FAX 0979-22-9722

e-mail office@n-heisei.org

<http://www.n-heisei.org/>

第1002回例会 平成22年11月25日(木)

●本日の例会プログラム 「会員増強フォーラム」 会員増強担当

◎次回例会プログラム ゲスト卓話「裁判員制度について」
大分家庭裁判所 中島氏



前回(1001回例会)の記録

平成22年11月18日(木)

■ゲスト

なし

■出席報告

会 員 数 25名
免 除 者 数 1名
対 象 者 数 24名
本日出席者 16名
欠 席 者 数 8名
出 席 率 66.07%

■ビジター

なし

■前々回出席報告の修正

前々回欠席者 7名
メイクアップ 4名
欠 席 者 3名
修正出席率 72.00%→ **88.00%**

●メイクアップ

永松・加来・矢頭(中津中央RC)、辛嶋(中津RC)

●欠席者

松本、長野(定)、小野

◎ロータリーソング 野外につき割愛

◎会長の時間 会長 青木秀暢

今日は大変お疲れ様でした。大勢の会員の参加により、とても綺麗になりました。向笠先生も大変喜んでおられるのではないかと思います。

この公園に来て「人類はひとつ」を眺めると、「これからも皆仲良くやって下さい」と言われているような気が致します。こうして年に一度、会員が清掃奉仕で記念公園に集う事は、大先輩の志に思いを馳せて会員の心が一つになるという意味で、素晴らしい事だと思います。それと郷土の偉人である福澤旧宅のすぐ近くにあるのも何かの縁ではと思われます。



◎幹事報告 幹事 土居孝信

●例会変更 宇佐八幡、豊前西、杵築、別府、別府北、別府東、別府中央、大分、大分東、大分臨海、大分南、大分中央、大分1985、大分城西(各RC)

●週報受理 仙台平成、杵築、熊本平成(各RC)

●報告事項

・県北福祉施設連絡協議会より「第17回ハーモニーフェスティバル終了のお礼」



- ・熊本水前寺RCより「創立10周年記念式典のご案内」
- ・中津商工会議所より「商工会議所ニュース」
- ・ガバナー事務所より「地区管理セミナー協力のお礼」
- ・ロータリーの友(英語版)届く
- ・中津RC12月プログラム届く

◎例会の食事メニュー

福沢茶屋の幕の内弁当

◎委員会報告 なし

◎ニコニコボックス なし



◎卓話

「向笠公園清掃」

中津市船場町の向笠記念公園にて

向笠公園は中津ロータリークラブ出身で、元国際ロータリークラブ会長の向笠広次さんを偲ぶために1985年に作られました。向笠元会長は100年以上の歴史があるロータリークラブで日本人として唯一の国際ロータリークラブの会長を務めた大先輩です。来年、



2010～2011年度

中津平成週報

Rotary Club Of Nakatsu Heisei

2010～2011年度
国際ロータリー・テーマ地域を育み、
大陸をつなぐ

2人目の日本人田中作次氏が国際ロータリークラブ会長になる予定です。

その公園を大分県中津市内の3つのロータリークラブの会員が年数回掃除をしています。今回は当クラブが担当しました。



◎ロータリー情報 担当：加来 敏男

11月はロータリー財団月間なので、「ロータリー財団の始まり：一人のロータリアンの夢が現実に」を紹介します。

ロータリーの父

ロータリー財団の始まりといえば、アーチ C. クランフを思い出される方も多いでしょう。彼がどのような経歴の持ち主かご存じですか？『奉仕の一世紀 国際ロータリー物語』には、その男、アーチ・クランフは驚くべき人物だった。1869年にペンシルベニア州カメットビルの貧しい家庭に生まれ、まだ幼少の頃、両親と2人の兄はオハイオ州クリーブランドに移住した。家計の足しにするために、12歳で学校を辞めて仕事に就いた。16歳の時、クヤホガ材木会社の使い走りになった。自分の考えで夜間学校に入学し、1日の大変な仕事の後、電車賃を節約するために、片道4マイルの距離を歩いて学校に通った。

会社の経営が危なくなった時、クヤホガ材木会社はクランフをマネージャーに昇格した。彼は会社の経営を好転させ、米国中西部の材木業界で最も収益性の高い企業の1つにまで発展させた。独学の元使い走りの少年はその後、同社を購入し、さらに銀行や汽船会社など、数々の企業の社長や副社長に就任した。

18歳のとき、クランフはフルートの演奏を独学で学んだ。3年後、フルートの名手となった彼はクリーブランド・シンフォニー・オーケストラのフルート演奏家となり、その後14年間シンフォニーで演奏を続けた。

1911年「材木一卸売ならびに小売」の職業分類でクリーブランド・ロータリー・クラブの創立会員となったクランフは、ロータリーでも事業や私生活におけるのと同じ素晴らしい業績の道をたどった。1912年にはクラブ会長になり、1916-17年度国際ロータリー・クラブ連合会会長になった。

と、彼の生い立ちについて書かれています。

始まりは26ドル50セント

1917年、アーチ・クランフはアメリカ・ジョージア州アトランタで開催された国際大会で、「ロータリーが基金をつくり、全世界的な規模で、慈善、教育、その他、社会奉仕の分野で、何かよいことをしようではないか」と提案しましたが、その背景には、彼の生い立ちが影響していたのかもしれません。

彼の提案は、同大会で採択されました。ロータリー基金（ロータリー財団の前身）への最初の寄付は、1917年、ミズーリ州カンザスシティロータリークラブからの、26ドル50セントでした。今日のレートで計算すると、3,000円と少しというところですが、今から約90年前のことです。現在の物価に換算するとどのくらいの金額になるのでしょうか。アメリカと日本の違いもあり、単純に換算することは難しいのですが、私たちが単純に考えているよりは、はるかに多い金額だったのかもしれません。

初めはゆっくりと

さて、今日、世界中で大きな貢献をし、重要な役割を果たしているロータリー財団が、はじめから順風満帆（じゅんぷうまんぱん）であったかという、決してそうではなかったようです。

続く数年間、クランフは一人芝居をしているように感じたに違いない。彼は人気も高く、尊敬された指導者であり、ロータリー基金が新しいロータリー・クラブの設立や人道的救援の役に立つという彼の提案は好意的に受けとめられていた。しかし、6年が経っても基金の残高はやっと米貨700ドルに達したに過ぎなかった。と、前出の『奉仕の一世紀 国際ロータリー物語』に著されています。

生みの苦しみを味わっていたこの基金も、基金総額が5,739ドル7セントに達した1928年のミネアポリス国際大会で、この基金による事業開始の時がきたとして、基金の名称をロータリー財団と改め、国際ロータリー定款・細則も改定されました。

この変更で、すべて元RI会長で構成される管理委員会が新しい財団を運営し、資金は国際ロータリーと別に管理することが規定されました。ロータリアンの善意で集まったお金が最初に使われたのは、その少し後のことです。前出の本によれば、1929年の株価暴落後、さまざまな慈善活動に対する寄付金が枯渇するようになった。ポール・ハリスが、ロータリー財団に最初の拠出を要請したのはその時であった。財団は、オハイオ州エリリアのロータリアン、エドガー F.「ダディー」アレンの発案で1919年に活動を開始したInternational Society for Crippled Children（国際障害児協会）のために500ドルの小切手を送った。とあります。

ロータリーの創始者の偉業に敬意を表す

ロータリー財団の発展の礎となったのは、ロータリーの創始者ポール・ハリスの偉大な業績に敬意を表し、その死を悼むロータリアンたちの思いでした。『ロータリアン必携』（1995年）の『ロータリー財団』には1947年1月27日に、ポール・ハリスがイリノイ州シカゴの自宅で亡くなりました。70か国以上30万人以上のロータリアンがロータリーの創始者の死を悼みました。しかし、ポール・ハリスの死は、財団の転換点になりました。（中略）

ポールの逝去で、寄付が国際ロータリーに相次いで寄せられるようになりました。財団はポール・ハリス記念基金を設け、ポールに敬意を表したいロータリアンに対して、財団強化のために寄付するよう要請しました。その反響は素晴らしいものでした。翌年の7月までに、米貨130万ドル以上が寄付され、永年の目標である200万ドルの寄付が射程距離に入ってきました。1947年には最初の財団プログラムが実現されました。それは、高等研究奨学金と呼ばれるもので、1年目は、米国、ベルギー、英国、フランス、メキシコ、中国の18人の若い人たちが選ばれ、他国でそれぞれの専門分野を勉強しました。当時は、この人たちはポール・ハリス・フェローと呼ばれていましたが、最初の国際親善奨学生でした。とあります。その後、教育プログラムに、人道的プログラムに、このロータリー財団は貢献しています。花が開き実を結んだこのシリーズの引用に度々登場する『奉仕の一世紀 国際ロータリー物語』には、「希望の財団」として、ロータリー財団に1章を取っています。そして、その結びには、次のように書かれています。ロータリー財団が、これほど効果的なのは、資金と人を組み合わせるからである。アーチ・クランフはこのように述べている。「金だけでは、大したことはできない。個人の奉仕は、金がなければ無力である。この2つが組み合わせられれば、文明への天の恵みとなることができる。」ポール・ハリスは1934年にクランフに出した手紙にこう書いている。「私たちは、あなたがこの運動に何年も注いだ努力以外に、おそらくこれといった努力をすることなく、いつか、突然、自分たちが何か非常に重要なものになっているのに気づくような気がする。」ロータリー財団への支援が世界的ではなかったときに書かれたこの言葉は、先見的であった。クランフは1951年に亡くなったが、彼が大事にしたロータリー財団はすでに確かな現実になり始めていた。しかし、自分のビジョンについて最も楽観的だった日のアーチ・クランフ自身でさえ、「小さなひらめき」と彼が呼んだアイデアがこれほどの力を持つと想像したであろうか？ロータリー財団は、多くのロータリアンによって、大きく花開くことになりました。特に、日本のロータリアンの果たす役割は、ロータリー財団の大きな支えになっていた。ロータリー財団に寄付をするとき、ロータリー財団の資金を使ってさまざまな奉仕活動をするとき、アーチ・クランフの「小さなひらめき」が、その第一歩であったことを思い出してください。

引用文献

『ロータリー日本五十年史』『奉仕の一世紀 国際ロータリー物語』『ロータリーの友』2004年11月号から